様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１２４０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｋ１３０４７

研究課題名（和文）ナラティヴ・アプローチに基づくイノベーション・プロセスの解明

研究課題名（英文）Narrative approach of innovation process

研究代表者
宇田川　元一（UDAGAWA, Motokazu）

埼玉大学・人文社会科学研究科・准教授

研究者番号：７０４０９４８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はナラティヴ・アプローチの視点を応用し、イノベーション・プロセスに対して新たな視座を提供し、その解明に寄与することにある。
　ナラティヴ・アプローチとは、語りに媒介されて現実が生成する過程を描き出す研究視座である。この知見は、医療や臨床心理の領域において展開されている。
　本研究を通じて、イノベーション・プロセスは、語りに媒介されていることが明らかになると同時に、媒介されることを通じて、次のプロセスがまた生成してくるというイノベーション・プロセスの連鎖的な過程が明らかになった。

研究成果の概要（英文）： The purpose of this research is to clarify the innovation process applying narrative approach perspective.
 Narrative approach is a research perspective which focuses on the generative process of social reality as narratively mediated process. This perspective have developed in medicine research and clinical psychology area.
 This research clarifies narratively mediated process of innovation. The mediated process generates other media which mediates another process sequentially. This sequential narrative mediation process has clarified from literature studies and research investigations.

研究分野：経営組織論、経営戦略論

キーワード：ナラティヴ・アプローチ　イノベーション・プロセス　社会的包摂　情報セキュリティ　媒介された学習

１．研究開始当初の背景

本研究の背景は、大きく２つある。ひとつは、日本企業のイノベーションの停滞である。組織の重さ研究などに示されたように、日本企業は非常に重い組織となっており、これに対して、実践的な解決策が見いだせていない状況にある。とりわけ、イノベーションという喫緊の課題に対しての知見が求められていることが背景のひとつである。

もうひとつは、科学的知見や知識と実践との間を架橋するための新たな視座として、医学や臨床心理などの領域において、ナラティヴ・アプローチの視点が示されていることである。これら２つの背景を結びつけることが背景としての問題意識である。

２．研究の目的

本研究はナラティヴ・アプローチの視点を応用し、イノベーション・プロセスに対して新たな視座を提供し、その解明に寄与することにある。

ナラティヴ・アプローチとは、語りに媒介されて現実が生成する過程を描き出す研究視座である。この知見は、医療や臨床心理の領域において展開されている。

本研究は、言葉による語りに限定されず、物質や制度なども、媒介として扱い、それら媒介がどのように現実を生成していくのかにフォーカスし、イノベーションのプロセスを解明することを試みることを目的としている。

３．研究の方法

研究は主に文献研究と調査研究を実施した。

文献研究は、ナラティヴ・アプローチに関わる文献や、広く媒介された現実を扱う文献をターゲットに、これらの議論を整理し、論点を構築することを試みた。

一方、調査研究では、事例調査を参与観察やヒアリングを通じて実施し、イノベーションが生成する過程で、媒介に着目してそのプロセスを解明することを試みた。

４．研究成果

本研究の研究成果は、大きく文献研究と、調査研究の２つに分類される。以下、それぞれについて述べる。

（１）文献研究の成果−宇田川(2015)を中心に

本研究の成果は、文献研究においては、宇田川(2015)が主要な成果である。

宇田川(2015)では、媒介によって、現実がどのように連鎖的に流転していくのかを理論的に解明したものである。この観点からすると、Weick(1979, 1995)やMorgan(1986)は、その源流の研究として位置づけられる。彼らが理論的に依拠したのは Bateson(1972, 1979)の階型理論であった。Batesonは、メタレベルの関係性によって、モノや人間の存在が生成される点を明らかにした重要な研究であり、昨今ではシステム思考の源流としても位置づけられる。Weick(1979, 1995)は、認知のフレームが組織の現実を象っていることを明らかにし、Morgan(1986)はメタファーの概念が、そうしたメタレベルの関係性を構築し、組織の現実を生成していることを明らかにした。だが、これらの研究には、現実の流転性（なぜ形成された関係性が変化していくのか）、流転の連鎖性（ある現実が生成したことによって、次々と新たな現実が連鎖的に生成してくること）、及び、媒介性（現実が媒介されて生成すること）の３点が樹分に考察されていない。これらの点にフォーカスしたのが、現代の組織論研究である。

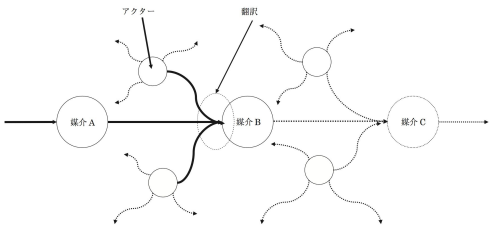

図１　媒介される翻訳プロセスの概念図

とりわけ、現実は媒介されることで、連鎖的に流転していく姿を描いたのは、Latour(1987, 1993)や Engeström(2008)の研究である。LatourやEngeströmの研究は、イノベーションのプロセスを人間という行為主体に限定せず、モノも含めたアクター間での会話のプロセスとして捉えている点で、極めて斬新であり、かつ、本研究のフォーカスするところに合致する視点であった。この観点は、こんにちの組織論研究では、大きく４つの展開が見られる。すなわち、制度敵企業家論（ないし、制度論）、実践としての戦略、組織ディスコース研究、そして、ナラティヴ・アプローチである。

制度的企業家論は、制度に媒介され、どのように組織の現実が生成するのかを解き明かそうとする研究であり、実践としての戦略は、戦略という実践や、物的な媒介物によっていかにして組織の現実が媒介、生成するのかに着目した研究である。一方、組織ディスコース研究は、ディスコースに媒介され、組織の現実が生成するのかを明らかにしようとしている。

そして、より本研究課題と近いナラティヴ・アプローチの研究は、媒介となる語りにフォーカスしている。例えば、ストーリーテリングの研究(Bate, 2004)では、語られたス

トーリーに媒介されて、組織メンバーが自分たちの組織の問題を語りはじめ、そこから変革プロセスがスタートしていく過程が明らかにされている。このように考えると、ナラティヴ・アプローチに代表される現実の連鎖的な流転を扱う研究の中心には、媒介という観点があることがわかる。

これらの知見を概念的にまとめたのが図１である。様々なアクター（技術や人、知識、モノなど）は、様々な方向に機能する方向性は有しているものの、媒介と出会うことがなければそれらが機能することはない。しかし、媒介との出会いによってある側面が機能するようになり、それが翻訳されて新たなアクターが生成してくる。これが、それまでは関係が無かったアクターとのつながりを媒介する、というように、媒介によって連鎖的に現実が生成し、流転するプロセスが見えてくる。したがって、この媒介に着目することによって、イノベーション・プロセスへの新しい道筋が拓けることが見えてくる。

ナラティヴの媒介性に着目したのは、宇田川(2016)で展開した議論である。ここでは、語る行為としてのナラティヴに着目し、語ることによって、関係性が構築され、そうして構築された関係性によって、語られることが変化していくという、語りによる連鎖・流転・媒介の過程が描かれている。

（２）調査研究の成果

文献研究を通じて明らかにされた、媒介され、連鎖的に流転する組織の現実、という観点は、イノベーション・プロセスそのものを描く上で極めて重要な視点となった。

文献研究を元にすると、組織を見る上で重要なことは、いかなる媒介、とりわけ、ナラティヴの観点からならば、組織における語りが、組織の実践を生成しているのか、ということに着目することが重要である。

この観点をもとに、調査研究は大きくふたつの研究が行われた。ひとつは、札幌にある精神科クリニック「札幌なかまの杜クリニック」への調査研究であり、もうひとつは、日本における情報セキュリティの社会ネットワーク型システムであるCSIRTがどのように形成されたのかに関する研究である。以下これらについて述べる。

１）札幌なかまの杜クリニックにおける調査研究

①札幌なかまの杜クリニックの概要

札幌なかまの杜クリニックは、札幌市にある精神科クリニックであり、同クリニックは北海道浦河町にある精神障害ケアのコミュニティとして著名なべてるの家の哲学と技法を元に設立されたクリニックである。べてるの家は精神障害ケアの領域では当事者研究や独自の SST(social skills training)などを用いたケアによって、薬物治療に依存しない新たな精神障害ケアの方法を展開し、大きな成果を挙げていることで知られる。このべてるの家の実践自体が、当事者研究などの方法を媒介にして、旧来の医者-患者の関係とは異なり、当事者と支援者が相互に問題を「研究する」という関係性を生成している点で極めて興味深い。事実、べてるの家の実践は近年、統合失調症ケアの領域では多くの科学的研究も実践され、多くの注目を集めるに至っている。

札幌なかまの杜クリニックは、そのべてるの家の思想と実践方法を元に作られた通院型クリニックであり、とりわけ、精神障害当事者／経験者がスタッフの半数を占めるなど、独自の社会包摂的マネジメントを展開している点で特徴的である。

②札幌なかまの杜クリニックにおける社会的包摂の実践

本研究期間を通じ、札幌なかまの杜クリニックにおける参与観察を実施してきた。そこでは、なぜこうした包摂的マネジメントという新たな取り組みが可能なのかという点に着目し、調査を実施した。とりわけ、その際に包摂を可能にしているナラティヴは何かということを調査した。

そこから見えてきたことは、同クリニックにおいては、当事者と支援者（医師、看護師、カウンセラー、ソーシャルワーカーなどのスタッフ）は、確かに関わり方は異なるものの、一般的に見られる明確な当事者と支援者の線引きがないとのことが見えてきた。例えば、あるスタッフは、自らがどのようにクリニックの支援者として関わるべきかで悩んでいた際に、当事者も交えた当事者研究を実施して、自らの困り事を共に研究を行ったりしている。この実践は、当事者研究の手法に媒介された実践であるが、同時に、こうした実践が、組織内において、当事者も支援者も、共に困難を抱えている存在として語り直されることにもなる。その結果として、旧来の精神障害ケアの中で制度的に構築されてきた専門性とそれに基づいた役割分担を創りだすナラティヴとは異なる、両者を隔てない媒介によって同クリニックが営まれているため、結果的には社会的包摂が実践されることになっているのである。

いうなれば、同クリニックにおける媒介は、苦労の物語であり、この物語は日常的な実践を通じて生成されるのである。この日常的な実践が関係性を構築するという点は、ナラティヴ・アプローチの語りが関係性をダイナミックに生成するという仮説に当てはまると同時に、苦労という、専門性とは異なる物語に媒介されている点も、こんにちの様々な組織の実践に対する示唆に繋がる、興味深い点であろう。

２）日本における CSIRT の誕生過程の調査研究

①CSIRT の概要

CSIRT とは Computer Security Incident Response Team の略語である。その名の通り、組織の中でコンピュータセキュリティを専門に扱うチームのことである。元々は米国で提唱された概念だが、1990 年代後半以降、日本企業の中でも設置が見られるようになり、近年では金融庁が金融機関に設置を義務付け、文部科学省も国立大学に設置を義務付ける中で、営利・非営利問わず拡大しつつあるコンピュータセキュリティ対応の枠組みである。

CSIRT 自体は組織内のチームであるが、特徴的な傾向は、CSIRT が他組織の CSIRT と連携を取りながらインシデントに対応している点にある。CSIRT はサイバー攻撃に対して自社だけでなく、時には異業種、時には競合他社と知見を共有しながらインシデントに対応している。これは、CSIRT が業界横断的なコミュニティを形成することで、単体の組織では対処しきれないほどに複雑化した、進化するサイバー攻撃に対応しているということを意味している。

②CSIRT の形成過程への調査研究

本調査は、文献などによるテキストデータの収集・分析とインタビューによってこのコミュニティ形成過程を考察した。その中で、「コンピュータセキュリティ・インシデントの性質が時代とともに変化してきた(黒澤, 2017)こと、「インシデントとセキュリティ対応は技術的・社会的状況に媒介されて相互に変化を促してきた(Kurosawa & Udagawa, 2016)」ことが明らかになった。

1990 年代半ばに Windows95 の登場に伴って、爆発的に PC とインターネットが普及して以降、コンピュータ・ウィルスなどに代表されるようなサイバー攻撃が社会的な問題として取り上げられるようになっていった。初期のコンピュータ・インシデントは、不特定多数のコンピュータを対象に、攻撃者にとって愉快犯的な動機に基づいて起こされてきた。だが、この結果、セキュリティのノウハウの蓄積と同時に、攻撃のノウハウも蓄積されていくことになる。

2000 年代以降のサイバー攻撃は、インターネットユーザーの大幅な増加を背景に、より攻撃者の商業的な目的が増してきた。具体的には、特定の対象を狙って活動を妨害したり、情報を盗む、といったことを目的とした標的型攻撃が激増していく。この背後には、攻撃ノウハウの蓄積が遠因として考えられる。当初は、コンピュータやネットワークのセキュリティと攻撃者の間での問題であった。だが、徐々にセキュリティのシステムが確立されるに従い、2010 年代以降は、セキュリティ・ホールをターゲットとした攻撃から「なりすまし型攻撃」や、「水飲み場攻撃（普段閲覧するサイトの複製を作り攻撃プロラムに感染させる手法)」といったように、ネットワークやプログラムの技術だけでなく、ソーシャル・エンジニアリング的な手法を組み込んだ形にサイバー攻撃が進化するようになる。

こうしたサイバー攻撃の急速な進化に媒介されて、個別組織が単独で対応していくことが困難になり、営利・非営利の垣根を越えて各組織がコミュニティ形成によってサイバー攻撃へのセキュリティ対応策を生み出すようになったのである。

本調査研究を通じて、サイバー攻撃やセキュリティ対応策のイノベーションが、社会的状況や技術的状況などに媒介されながら生成されていく過程が明らかにされた。

（３）本研究のまとめ

本研究を通じて、本研究のフォーカスするイノベーション・プロセスのような社会的現実の生成は、語りによって媒介されること、そして、それが連鎖的に次の生成過程を媒介していくこと、その結果、現実が流転していくことが明らかになった。

興味深い点は、媒介は語りに限定されず、技術や制度なども含まれるということ、さらには、こうしたプロセス自体が、媒介の出現によって、ダイナミックな再編成の可能性を常に孕んでいるということである。すなわち、プロセスが実在するというよりも、媒介されることによってプロセスが生成される、という視点は、旧来の通説上のプロセスの存在論とは大きく異なる存在論を有しているのである。

従って、このダイナミックなプロセスを生成させるためには、いかなる介入が可能になってくるのかが今後の研究の視点になる。とりわけ、相互に異質な存在として行為者が認識している関係性が、いかなる語りを通じて変容していくのか、という点は、今後の重要な研究課題であり、この点が明らかになると、イノベーション・プロセスがより明確に解明されることになるだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　5 件）

① Takashi, MAJIMA, Motokazu UDAGAWA, Masato YOTSUMOTO, Thomas Taro Lennerfors, Green IT did not Take Place: The Transformation of Environmentally Friendly IT in Japan, 日本情報経営学会誌, 37, 81-96.査読無

②黒澤壮史(2017)「コンピュータ・インシデントの歴史的変遷と現代的課題」『神戸学院大学経営学論集』13，45-50.査読無

③黒澤壮史(2016)「イシューセリング行動における言説の戦略」『日本経営学会経営学論集』26,(26)1-2.査読無

④Richard Miller, Masashi Kurosawa (2016) Collaboration between language teaching faculty and content faculty for success in research and pedagogy, *The Journal of Business Management*, 12,83-94. 査読無

⑤宇田川元一(2015)「生成する組織の研究−流転・連鎖・媒介する組織パースペクティヴの可能性−」『組織科学』49(2)，15-28.査読無

〔学会発表〕（計　8 件）
①黒澤壮史「イシューセリング行動における言説の戦略」日本経営学会第 90 会大会、専修大学（東京都千代田区)、2016.9.3.

② Motokazu UDAGAWA, Takashi MAJIMA. Narrative as a media of caring organization: A case of social inclusion in organization through dialogical practice. Standing Conference on Organizational Symbolism 2016, Uppsala University（スウェーデン），2016.7.14.

③ Masashi KUROSAWA, Motokazu UDAGAWA. From “Public health”to “neighborhood security”: A narrative approach to the change of metaphor for computer security in Japan. Standing Conference on Organizational Symbolism 2016, Uppsala University（スウェーデン)、2016.7.13.

④ Masato, SASAKI, Ulrike Schade. Open innovation and CVC in Japanese companies. Joint JFIT-STAJE Conference at UC San Diego, UC San Diego(アメリカ), 2016.5.5.

⑤宇田川元一「生成する組織の研究」組織学会九州支部会、西南学院大学（福岡県福岡市)、2016.3.19.

⑥宇田川元一「語りが組織を生成する―ナラティヴ・アプローチとしての組織ディスコース―」経営情報学会、沖縄コンベンションセンター（沖縄県宜野湾市)、2015.11.29.

⑦宇田川元一「流転する世界を捉え、変える―ナラティヴ・アプローチの可能性―」 経営哲学学会、慶應義塾大学（東京都港区)、2015.9.9.

⑧黒澤壮史「効果的なイシューセリング行動における言説の役割」日本経営学会関西部会、神戸学院大学（兵庫県神戸市)、2015.6.13.

〔図書〕（計　１件）

①佐々木将人・藤原雅俊・坪山雄樹・沼上幹・加藤俊彦・軽部大(2016)「組織の〈重さ〉――組織の劣化現象の測定とその解消に向けて」『インタンジブルズ・エコノミー』第二章、312(79-102)、東京大学出版会.

６．研究組織
(1)研究代表者
宇田川　元一（UDAGAWA, Motokazu）
埼玉大学・人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：70409481

(2)研究分担者
黒澤　壮史（KUROSAWA, Masashi）
神戸学院大学・経営学部・准教授
研究者番号：10548845

佐々木　将人（SASAKI, Masato）
一橋大学・大学院商学研究科・准教授
研究者番号：60515063